第 2 回 4/20 「デジタル時代における クラシック音楽の課題」

武藤 英明（むとう・ひであき）**先生** **指揮者（プラハ在住）**

桐朋学園大学卒業。齋藤秀雄に指揮を学ぶ。
1976 年、チェコのプラハに渡り、
ズデニェク・コシュラーに師事する。
1977 年、国際バルトーク・セミナーに参加し、
最優秀指揮者に輝く。
1986 年、プラハ放送交響楽団とサントリーホール・
オープニングシリーズで日本デビュー。
1990 年、同放送交響楽団と「プラハの春」国際音楽祭に出演。
2004 年、名古屋フィルハーモニー交響楽団と再度
「プラハの春」国際音楽祭に出演。
2001 年～、チェコ・プラハ管弦楽団と毎年日本全国各地で公演。
今までに指揮している主なオーケストラ:
プラハ交響楽団FOK、スロヴァキア・フィルハーモニー、プラハ放送交響楽団、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団、フランクフルト放送交響楽団、ロシア・フィルハーモニー交響楽団、ネザーランド・フィルハーモニー、
国内では、札幌交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、読売日本交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団　などなど
著書:「スメタナ弦楽四重奏団が語るクワルテットのすべて」(音楽之友社)

《講義概要》

チェコを中心に世界のオーケストラを指揮し、様々な場で活躍している武藤英明氏が、デジタル時代におけるクラシック音楽の課題について「感性と知性」をキーワードに講義を行った。

講義ではまず、アナログとデジタルの違いやその関係性を説明し、アナログの代表であるクラシック音楽の魅力について、動画の上映や自然倍音の説明等を交えて楽しく解説。国内外のオーケストラの現状や課題についても言及した。

また、音楽のデジタル化を例に、今後更にデジタル化を発展させるためには、デジタルを駆使する知性だけでなく、ものづくりに携わる人の感性を磨くことが重要であると言及。300 年の歴史を越えたオーケストラ演奏を聴くことは、感性を磨くことに繋がると伝えた。

最後に、日々感性を磨き「即断即決即答」のできる「危機管理能力」を身につけることの大切さについても示し、現代を生きる上で必要な考え方を示す講義となった。

《受講生の感想》

●この授業を通してクラシック音楽のよさを知るとともに、専門的な知識を得ることもできました。例えば、倍音、基音、アナログとデジタルの違いなど、とても分かりやすく教えていただきました。また、日常的なことで大事なことも教えていただき、危機管理能力を身につけ、感性も磨きたいです。

立命館大学・産業社会学部・1回生

●ボーカロイドや3D映像などはまだまだ人間に近づいていったり、ハイテクになっていく伸びしろがあると思う。それらを伸ばすために製作者はアナログの音楽を視聴して感性を磨く必要があると思った。アナログ、デジタルはどちらが優れているか、良いかと比較するものではないのだと思いました。

立命館大学・映像学部・2回生

●日本と世界のオーケストラの現状のお話しはとても興味深かったです。また、一番印象に残った言葉は「危機管理能力」という言葉です。即断・即決することの大切さ、エントリーシートのことなど就職に役立つことも聞くことができて勉強になりました。「感性を磨く」ことを頭においてこれから頑張っていきたいと思います。

立命館大学・産業社会学部・1回生

●今回のテーマである「感性を磨く」ということが大きく様々なことに関わっていることがよく分かりました。音楽の力には驚かされ、感動しました。今からすぐにでも感性を磨いていくことを意識していきたいなと思います。ぜひ、オーケストラも見に行きたいと思います。

立命館大学・産業社会学部・1回生

●知性と感性の話、そしてアナログとデジタルの違いの話はとても印象に残った。「知性はのばすもの、感性はみがくもの」という言葉を聞いて、自分の感性を今まで本当に磨けてきたのかについて考えさせられた。いまさらではあるが、本当に自分の能力を伸ばせるものを見つけたいと思う。

立命館大学・産業社会学部・1回生

●デジタル時代の今、クラシック音楽は危機にあると思っていましたが、デジタル音楽が発達するためには感性を磨くことが大事であると聞き、クラシックはまだまだこの時代でも重宝される音楽のジャンルであると思いました。最後に見せていただいたベネズエラのオーケストラの演奏を聴いて、“感性の音楽”というものがどのようなものか分かりました。私も感性を磨くために色々なものに触れていきたいです。

立命館大学・産業社会学部・1回生